

W-2-1 *dehi-edhi* の法則：印欧祖語 *d^h に由来するサンスクリット h¹

大山 祐亮

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

1. はじめに

サンスクリット語 (Skt.) においては、現在語幹形成にテーマ母音 *-a-* を用いない *athematic* の動詞の現在二人称単数命令形の語尾に、*-dhi* と *-hi* [hi] の二種類がある。より古い形を保存しているのは前者であるとされ、近縁のイラン語派の古アヴェスター語 (OAv.) *-dī* などとともにインド・イラン祖語 (IIr.) **-d^hi*、最終的にはインド・ヨーロッパ祖語 (PIE) **-d^hi* に規則的に遡ることができる。

一方で、後者の *-hi* という語尾は、規則通りなら PIE **-ǵ^hi* に遡ると期待される。しかし、そのような命令形語尾が他の娘言語に例証されていないことや、Skt. *grhá-* 「家」 < PIE **ǵ^hr̥d^hó-* のように命令形語尾以外に同様の变化を示す類例が存在するといった要因から、この *-hi* も PIE **-d^hi* が何らかの条件下において音韻変化を経たものであると考えられている²。本発表ではこの PIE **-d^hi* > Skt. *h* という変化を **h 化** と呼称する。しかし、この h 化の環境を確定させることは容易ではなく、先行研究の多くが、母音の後ろで起こるが例外があると述べたり (Baum 2006: 23)、「母音の後ろの何らかの環境」(Gotō 2013: 96)あるいは「何らかの音韻的な環境」(Gotō 2017: 362)のように断定を避けた言及をするにとどまっている。

そして、この問題の解決をさらに困難としているのが、語源的な PIE **-d^hi* に対して *dh* と *h* の両方が例証されている語 (e.g. Skt. *śṛṇu-dhi* ~ *śṛṇu-hi* 「聞け (PRS.IMPV.2SG.)」 < PIE **-d^hi*) が存在することと、所謂俗語であるプラークリット諸語に *dh* > *h* という変化がしばしばみられるということである (e.g. Skt. *dadhāti* = Pāli *dahati* 「置き定める (PRS.3SG.)」)。このため、h 化は初期の先行研究においてはプラークリット諸語の影響 (prākṛtism) あるいは方言形によるものであると見なされていた (Ascoli 1868: 258, von Bradke 1886: 693, Meillet 1912-1913: 123)。

しかしながら、*de-hi* 「与えよ (PRS.IMPV.2SG.)」と *e-dhi* 「〜であれ (PRS.IMPV.2SG.)」のようなほぼ同一の環境をもつ基礎語彙に *dh* と *h* の揺れがなく、はっきりとした区別があるということを考えると、*dh* と *h* の分布は偶然の産物ではなく、何らかの規則が存在すると考えるのが妥当である。そこで本発表では、h 化がどのような環境で起こるのか、そしてどのような音変化として解釈されるべきなのかを考察する。

2. データと先行研究

サンスクリットにおいて、h 化が起こりうることが知られている形態は以下の通りである。³

(a) 「家」という語

例： Skt. *grhá-* < PIE **ǵ^hr̥d^hó-*, Skt. *gehá-* (Pāli *ge-dha-*⁴) < **ǵai^hd^há-* (?) (Renou 1958: 71)

(b) √*rudh/ruh* 「育つ」の活用形および派生語の一部

例： Skt. *róhati* ~ *ródhati* (PRS.3SG.), *rohít-* 「赤い (馬)」 < PIE *h₁reud^h-* (cf. *rudhirá-* 「血の」 (AV.+))

(c) √*dhā* 「置き定める」の派生語の一部

例： Skt. *hi-tá-* (PST.PTCP.), *-hi-ti-* ~ *-dhi-ti-* 「使い」 < PIE **-d^hh₁-* (cf. Skt. *da-dhā-ti*, etc. < PIE **-d^heh₁-*)

¹ 謝辞：本研究は JSPS 科研費 19J22945 の助成を受けたものである。

² なお、先行研究においては IIr. **-b^h* > Skt. *h* という h 化の例も **-d^h* の h 化の例と併せて取り上げられることがあるが、**-b^h* の場合には **-d^h* の場合とは異なり子音の後でも h 化し、かつ例が非常に限られている (Lubotsky 1995: 127)。それに加えて、**-b^h* の場合には必ずサンスクリットの内部で h 化しているものと h 化していないものとの揺れが確認できるため、**-b^h* の h 化と **-d^h* の h 化は別の現象であると考えられる。

³ 先行研究で挙げられることがある例のうち、√*sprh* は PIE **sperǵ^h* に由来する (Mayrhofer 1986–2001: II: 774–775, Rix et al. 2001: 581) ため、√*sprdh* とは別語根である。Skt. *uttará-hi* 等も PIE **-ǵ^hi* に遡るため、h 化の例ではない (cf. OAv. *ye-zī*)。

⁴ *Aṅguttara-Nikāya* 1.154.1 = 3.128.23 でしか例証されておらず、また写本の読みにも若干の疑問の余地があることを付言する (Kuiper 1938: 301)。

- (d) \sqrt{ah} 「言う」の活用形
 例: Skt. $\acute{a}h-a$ (PF.3SG.), $\acute{a}h-ur$ (PF.3PL.) < Iir. $*\acute{a}d^h-$ (cf. OAv. $\acute{a}dar\acute{e}$ (PF.3PL.))
- (e) 場所を表す副詞
 例: Skt. $i-h\acute{a}$ (~ Pāli $i-dha$) 「ここで」, $sa-h\acute{a}$ ~ $sa-dha-$ 「ともに」, $k\acute{u}-ha$ 「どこで」
 < PIE $*-d^he$ (Hübschmann 1877: 393) (cf. Skt. $\acute{a}-dha$ 「その後」, $ka-dha-$ 「どこで」)
- (f) 中動体の一人称複数・双数語尾
 例: Skt. $-mah\acute{i}$ (PRS.1PL.MED), $-vah\acute{i}$ (PRS.1DU.MED) < PIE $*-med^h_2(-i?)$, $*-\acute{u}ed^h_2(-i?)$
- (g) athematic 活用の現在二人称単数命令形の多く (II, III, V 類の多く、IX 類の全て)
 例: Skt. $i-h\acute{i}$ 「行け」, $br\acute{u}-h\acute{i}$ 「言え」, $de-h\acute{i}$ 「与えよ」, $dhe-h\acute{i}$ 「置き定めよ」 < PIE $*-d^hi$
 (cf. $j\acute{u}hu-dh\acute{i}$ 「献供せよ」, $e-dh\acute{i}$ 「~であれ」, $vid-dh\acute{i}$ 「知れ」, etc.)
- (h) アオリスト二人称単数命令形の一部
 例: Skt. $p\acute{a}-h\acute{i}$ 「飲め」, $ga-h\acute{i}$ ~ $ga-dh\acute{i}$ 「行け」 < PIE $*-d^hi$ (cf. $kr\grave{e}-dh\acute{i}$ 「せよ」, $\acute{s}ru-dh\acute{i}$ 「聞け」, etc.)

なお、これら以外の形態素における PIE $*d^h$ は全てそのまま Skt. dh として保たれる。

- 例: $\sqrt{dh\acute{a}v}$ 「走る」, $\sqrt{dh\acute{i}}$ 「考える」, \sqrt{dh} 「燃やす」等の語根の活用形 (e.g. $dh\acute{a}vati$, $d\acute{i}dhet$, $\acute{i}dh\acute{e}$)
 不定詞語尾- $(\acute{a}-)dh\acute{y}ai$ < PIE $*-d^hi\acute{o}i$ (Rix 1976)
 子音の直後にある $*d^h$ (e.g. $ad-dh\acute{i}$ 「食べよ」, $vid-dh\acute{i}$ 「知れ」, $\acute{s}ag-dh\acute{i}$ 「能え」)

この PIE $*d^h$ > Skt. h という音変化の環境を明らかにしようと試みた先行研究としては、以下のようなものが挙げられる。しかし、これらには全て反例が存在するため、この問題は未だに解決されていないといえることができる。

- (1) PIE $*d^h$ > Skt. $h / \sqrt{V} _ V$ (Wackernagel 1896: 252) ⁵
 反例: $\acute{i}dh\acute{e}$, $\acute{i}dh\acute{i}r\acute{e}$ などの \sqrt{dh} 「燃やす」の活用形、 $y\acute{o}dhi$ 「戦え」など⁶
- (2) PIE $*d^h$ > Skt. $h / \sqrt{V} _ V$ (Bloch 1929)
 反例: $\acute{i}dh\acute{e}$, $\acute{i}dh\acute{i}r\acute{e}$ などの \sqrt{dh} 「燃やす」の活用形、 $y\acute{o}dhi$ 「戦え」など
- (3) PIE $*d^h$ > Skt. $h / V _ \check{V}\#^7, \# _ it, C _ it$ (Lubotsky 1995a: 140–141)
 反例: $j\acute{u}hudh\acute{i}$ 「献供せよ」, $dh\acute{i}t\acute{a}v\acute{a}nam$ 「贈り物を与える者(ACC.SG.)」など⁸
- (4) PIE $*d^h$ > Skt. $h / _ [-back] _ V$ (Kobayashi 2004: 89, cf. Kobayashi 2017: 333 ‘sporadic debuccalization’)
 反例: $\acute{i}dh\acute{e}$, $\acute{i}dh\acute{i}r\acute{e}$ などの \sqrt{dh} 「燃やす」の活用形、 $edhi$ 「~であれ」⁹など (恐らくは Pāli $idha$ も¹⁰)

⁵ Kobayashi (2004: 87) が “This generalization, however, faces too many counterexamples” と述べているように、この仮説の反例は非常に多い。

⁶ なお、 $y\acute{o}dhi$ (および $b\acute{o}dhi$ 「目覚めよ」) は Skt. の形態法からは期待されない形であり、本来は $*yuddhi$ (および $*buddhi$) という形が期待される。これについては、acrostatic の形であるという説明 (Insler 1972)、PIE $*-i$ が再建できるとするもの (Bammesberger 1983)、 $*je\acute{u}d^h_2$ の二重子音の解消されたもの (Mayrhofer 1986: 111–112)、 $-si$ に終わる命令形からの類推によるもの (Jasanoff 2002: 292–293) という説明方法が存在するが、どれも他の娘言語のデータに基づいていないため、妥当ではない。さらに、同様の例として $b\acute{o}dhi$ 「在れ」という語形も挙げられ、こちらも Wackernagel (1896) 以来不規則な形であるとみなされている。これには $*bhava$ > $*bho$ という変化の後に $*-dhi$ が付加されたという説明 (Jamison 1997) や、最初から PIE $*b^he_2-d^hi$ を再建する説 (Lubotsky 1995b: 224–246 が存在するが、前者は規則性仮説に反するため妥当ではなく、後者も他の娘言語のデータに基づいていないため、やはり妥当ではない。これらの語形については、Gotō (1987: 218) のように不明とするのが妥当である。

⁷ Lubotsky は $*Vzd^hV$ のように $*-z$ が介在する場合を h 化の環境から除いて $edhi$ (< Iir. $*azd^hi$) や $\acute{s}adh\acute{i}$ 「教えよ」 (< Iir. $*\acute{e}azd^hi$) のような形態に h 化が起こらないことを説明しているが、 h 化の起こる $edhi$ も $*-az-$ > $-e-$ を経ている可能性が高い ($-e-$ の起源についてこれ以外の説明方法が考え難い) ため、この方法で $edhi$ や $\acute{s}adh\acute{i}$ を説明することは不可能であると思われる。

⁸ Lubotsky は “The formation and meaning of $dh\acute{i}t\acute{a}van-$ (3.27.2c, 3.40.3a) are unclear” と述べて $dh\acute{i}t\acute{a}v\acute{a}nam$ という例の説明を回避している。しかしながら、Lubotsky も h 化を音法則として定義しようと試みている以上、これは正当化され得ない。

⁹ Kobayashi も Lubotsky と同様に $*-z$ が介在する場合を環境から除いているが、Lubotsky の場合と同じ問題点が存在する。

¹⁰ これは h 化がパーリ語 (あるいはそれに準ずる方言) の分化以降の改新であると考えれば反例ではなくなるが、その

これ以外に、*juhudhi* < PIE *ǵ^hu-ǵ^hu-d^{hi} 「献供せよ」など、h 化した場合に h が連続する位置では h 化が起こらないという主張も存在するが (Whitney 1889: 245)、これには *jahihi* < PIE *ǵ^he-ǵ^hhi-d^{hi} 「捨てよ」という反例が存在する (Kobayashi 2004: 89)。さらに、二音節語には h 化が起こらないという最小語効果の存在を主張するものもある (Turner 1975: 292, Kobayashi 2004: 88–89)。これは必ずしも誤りであると断言はできないが、*kr̥dhi* 「せよ」のようなアオリスト命令法に例がほぼ限られ、そのアオリスト命令法にも *pāhi* 「飲め」という反例が存在するため、疑問の余地がある。したがって、いずれの先行研究の仮説にも疑問の余地があるといえる。

以上のことを踏まえると、ほとんどの先行研究が前提としている、h 化が母音間の何らかの位置で起こるという観察はそもそも正しいのだろうかという疑問が生じてくる。上で挙げたように *dehi* と *edhi* のようなほぼ同一の環境で h 化の有無が分かれる例が存在することを考慮すると、母音間の何らかの環境どころか、サンスクリット語の共時的な音韻体系を前提としてこの音変化の環境を発見すること自体が不可能であるように思われる。

したがって、むしろ、この h 化の有無のデータの正しい解釈は、少なくとも子音の直後では h 化が起こらない (Lubotsky 1995a: 133)、というものであると思われる。さらに、同一の形態で h 化の有無に揺れがある *róhati* ~ *ródhati* のような例も存在するため、プラークリット諸語の影響、方言形、類推などの要因が少なくとも一部の h 化の例の背後にあることもまた確かであると思われる。したがって、全ての h 化の環境を一つの音法則で説明することも不可能であると考えられる。

したがって、本発表では、サンスクリットの前段階、すなわち印欧祖語およびインド・イラン祖語の段階、およびそこからイラン語派と分派してサンスクリットに至るまでの時期の体系がどのようであったと再建されるか、という点に着目する (ただし、子音にかかわる音韻的な環境は印欧祖語とインド・イラン祖語でさほど大きく変化しないため、おおむね印欧祖語の形を言及すれば事足りる)。その上で、子音間では h 化が起こらないといったように、この環境では必ず h 化が起こる、あるいは起こらないという h 化の有無に揺れない環境を明らかにすることで、この h 化の起源を明らかにすることを試みる。

3. 仮説提起

h 化の考察にあたってまず注目すべきは、イラン語派では h 化か、あるいはそれに準ずる変化が起こった痕跡がみられないということである。例えば Skt. *dehi* のアヴェスター語での対応形は YAv. *dazdi* であるが、これは PIE *de-dh₃-d^{hi} > Ilr. *da-d^(h)H-d^{hi} の規則通りの反映形である。したがって、h 化が最初に起こったのは、インド・アーリヤ語派がイラン語派と分かれた後であることがわかる。

これを踏まえて、サンスクリットで h 化の有無が割れる代表例である現在およびアオリストの命令形の主要な語形 *brūhi*, *dehi*, *viddhi*, *juhudhi*, *edhi*, *kr̥dhi*, *śrudhi* という例の祖形を手がかりとして、何らかの傾向が見られないかをまず検討する。これらの形態のインド・イラン祖語形をイラン語派をはじめとする他の娘言語との対応から再建すると、それぞれ Ilr. *mruH-d^{hi} ~ *bruH-d^{hi} (cf. YAv. *mrū̯di*)、Ilr. *da-d^(h)H-d^{hi}、Ilr. *uid-d^{hi}、Ilr. *juj^hu-d^{hi}、Ilr. *(H)z-d^{hi}¹¹、Ilr. *kr̥-d^{hi}、Ilr. *cru-d^{hi} となる。これらの例から、サンスクリットでは同じ環境にあっても、その前段階を考慮すると、h 化が起こる形態には *d^h の直前に *H が再建されるようである、ということがこれらの例の範囲では見て取れる。このことから、(PIE *Hd^h >) Ilr. *Hd^h > Skt. *h* という音変化が成立するのではないか、という仮説を提起することができる。

仮説 : (PIE *d^h >) Ilr. *d^h > Skt. *h* / H_(V)

4. 仮説検証と分析

以下では、この仮説が本当に正しいかどうかを検討する。前述の例証されている語形の一覧を、その

場合には他の位置で h 化していない *d^h を保っている例が一例もないことに疑問の余地がある。

¹¹ この形態はサンスクリットに至るまでに語根が標準階梯に変化し、*(H)az-d^{hi} となっていたと考えられる (cf. OAv. *zdi*)。

前段階で*Hd^h という音連続を含んでいるかという基準で並べ替えると、以下のようになる。

表 1：語源的な*Hd^hの有無と h 化

Iir. *Hd ^h	h 化が起こる	h 化が起こらない	h 化の有無に揺れがある
あり	<i>brūhi</i> < PIE *mluH-d ^h i ¹² <i>dehi</i> < PIE *de-dh ₃ -d ^h i ¹³ <i>dhehi</i> . < PIE *d ^h e-d ^h h ₁ -d ^h i ¹⁴ <i>pāhi</i> . < PIE *peh ₃ -d ^h i ¹⁵ <i>punīhi</i> < PIE *pu-n-H-d ^h i ¹⁶ <i>piprihi</i> < PIE *pi-priH-d ^h i など	例なし	例なし
なし	<i>ihī</i> < PIE *(h ₁)i-d ^h i <i>jahi</i> < PIE *g ^{wh} ŋ-d ^h i <i>grhá-</i> < PIE *g ^h r ^h d ^h ó- <i>hitá-</i> < PIE *d ^h h ₁ -to- <i>rohit-</i> < PIE *h ₁ reud ^h -it- <i>áha, áhur</i> < Iir. *ád ^h - <i>kúha</i> < PIE *ku-d ^h e <i>kr̥nuhi</i> < Iir. *kr̥-nu-d ^h i <i>-mahi</i> < PIE *-med ^h h ₂ (-i?), <i>-vahi</i> < PIE *-ued ^h h ₂ (-i?) など	<i>rudhirá-</i> < PIE *h ₁ rud ^h -ro- <i>dadhāti</i> < PIE *de-d ^h eh ₁ -ti <i>juhudhi</i> < PIE *ǵ ^h u-ǵ ^h u-d ^h i <i>edhi</i> < Pre-Skt. *az-d ^h i (< PIE *h ₁ s-d ^h i) <i>viddhi</i> < PIE *uid-d ^h i <i>kr̥dhi</i> < PIE *k ^w r̥-d ^h i ¹⁷ <i>ádha</i> < PIE *(h ₁)e-d ^h e <i>kadha-</i> < PIE *k ^w o-d ^h e <i>īdhé</i> < PIE *h ₂ i-h ₂ id ^h - <i>-(á-)dhyai</i> < PIE *-d ^h iōi など	<i>gehá-</i> ~ Pāli <i>gedha-</i> < Pre-Skt. *gaj ^h d ^h á- <i>róhati</i> ~ <i>ródhati</i> < PIE *h ₁ reud ^h -e-ti <i>-hiti-</i> ~ <i>-dhiti-</i> < PIE *d ^h h ₁ -ti- <i>ihá</i> ~ Pāli <i>idha</i> < PIE *(h ₁)i-d ^h e <i>sahá</i> ~ <i>sadha-</i> < PIE *sm̥-d ^h e <i>śr̥nuhi</i> ~ <i>śr̥nudhī</i> < PIE *kr̥-n-u-d ^h i など

上の表からまず読み取れるのは、Iir. *Hd^h > Skt. h に例外が存在しないということである。一方で、それ以外の位置の全ての例が Iir. *d^h > Skt. dh を示すわけではなく、散発的に Iir. *d^h > Skt. h が起こっている例や、dh と h の出現に揺れがある例も存在する。すなわち、前述の仮説では、h 化の有無を完全に予測することはできないものの、h 化が必ず起こる環境を予測することには成功しているといえる。とりわけ、必ず現在語幹末に*Hをもつ IX 類動詞で必ず h 化が起こることと、動詞ごとに末尾が異なる現在語幹をもつアオリストと II、III 類動詞の現在で h 化の有無が割れることは、本発表の仮説によって最もよく説明することができる。juhudhi, śādhi, bodhi, yódhi 等の形が規則通りの反映形として説明される。したがって、Iir. *d^h > Skt. h / H__(V) という音変化の想定には一定の理があるといえる。

問題は、*H に後続しない位置で Iir. *d^h > Skt. h を示す例をどのように説明するか、とりわけ ihī, jahi, -mahi 等の例に揺れないのはなぜなのかという点である。まず、PIE *(h₁)i-d^hi > Skt. ihī、PIE *(h₁)id^hé > Skt. ihá 等の例に関しては、Skt. īdhiré, Skt. idhāná-, Pāli idha 等の例の存在を考慮すると、これらを規則的

¹² これ以外の h 化が起こる II 類動詞の現在命令形の例としては、*jahihi* < PIE *ǵ^heg^hh₁-d^hi、*bhāhi* < PIE *b^heh₂-d^hi、*yāhi* < PIE *(H)ieh₂-d^hi、*vāhi* < PIE *h₂ueh₁-d^hi、*vīhi* < PIE *uiH-d^hi、*snāhi* (AV.+) < PIE *(s)neh₂-d^hi、*psāhi* (AV.+) < PIE *b^hs-eH-d^hi、*snathihī* < PIE *k^hneh₂-d^hi、*stanihi* < PIE *steh₂-d^hi が挙げられる。

¹³ *dehi* および *dhehi* の -e- の由来について、Hoffmann (1956: 21) によればインド側では Iir. *dad^hd^hi > *dazd^hi という異化が起こっている。ただし、異化で音が変化するのではなく脱落するという例は管見の限りでは存在しないため、疑問の余地がある。Tedesco (1968) は -e- がプラークリット諸語の影響だとしているが、*dehi-edhi* の法則を放棄してまでそれを支持すべき特別な理由は存在しない。Iir. *d^(h)Hd^h > *z^h という音法則が存在する可能性も否定できない。いずれにせよ、印欧祖語の段階では *-dh₃d^h と歯 (茎) 音の間に喉音が存在していたことは心にとめておく必要がある。

¹⁴ これら以外の h 化が起こる III 類動詞の現在命令形の例としては、*dīdihī* < PIE *dih₂-dh₂-d^hi、*mimihī* < PIE *mi-mih₁-d^hi、*ririhī* < PIE *ri-rih₁-d^hi が挙げられる。

¹⁵ これ以外の h 化が起こるアオリスト命令形の例としては、*māhi* < PIE *meh₁-d^hi、*sāhi* < PIE *seh₂-d^hi が挙げられる。

¹⁶ これ以外の IX 類動詞の現在命令形の例としては、*jānīhi* < PIE *ǵ^hŋ-n-h₁-d^hi、*śrīñihī* < PIE *kri-n-H-d^hi が挙げられる。

¹⁷ これ以外の h 化のないアオリスト命令形の例として、*śrudhi* < PIE *kru-d^hi、*śādhi* < PIE *keHs-d^hi 等が挙げられる。

な音変化の結果であるとみなすことは困難である。したがって、Skt. *ihī* と Skt. *jahī* については、*h* 化を経た他の動詞の命令形からの類推的拡張か、それに準ずる説明をする必要があると考えられる。

一方で、動词语尾の Skt. *-mahī* (< PIE **-med^hh₂(-i?)*) については、本発表で提起した仮説に類似した環境における音変化 IIr. **d^h > h / __H#*あるいは IIr. **d^h > h / __Hi#*を定義可能である可能性がある。しかし、他に例が存在しないため定かではなく、現状ではこの音法則を定義することにあまり大きな利点はない。また、これら以外の **Hd^h* でない環境における *h* 化の例は、Kobayashi (2004: 90) の述べている（プラークリット諸語の影響、方言、語彙拡散、形態的類推等の影響による）散発的な General Deocclusion とみなすほかないと思われる。¹⁸

さらに、なぜ IIr. **H* の直後で変化が起こるのかという点についても考察する必要がある。これについては、(PIE **g^h*) IIr. **j^h* > Skt. *h* という規則的な音変化が存在することを考慮すると、この *h* 化は Lubotsky (1995a: 141) の主張するのと同様に順行口蓋化の一種であると見なすのが妥当である¹⁹。すなわち、**d^h > h* というよりは **d^h > *j^h > h* という音変化を想定するのが妥当である。逆に言えば、IIr. **H* は口蓋化を引き起こすような音であったことが示唆される。そしてこれは、PIE **H* の子音間での反映形がサンスクリットで最も無標な母音 **a* ではなく前舌母音の *i* である、という事実とも関係があるように思われる。すなわち、IIr. **H* は [-back] という素性をもつ音であった可能性があるといえる。

5. 結論

以上の議論から、サンスクリットにおける *h* 化の本来の環境は以下のようなものであったとみなすのが最も妥当であると考えられる。以後、この環境における *h* 化を **dehi-edhi の法則** と呼称する。

(PIE **d^h* >) IIr. **d^h* > (**j^h* >) Skt. *h* / H__ (V) (*dehi-edhi* の法則)

この変化は形態語尾の付与された際にほぼ例が限られるため、派生環境に限られる（すなわち、**H* と **d^h* の間に形態素境界がある場合のみ起こる）変化である可能性も否定できない。また、これ以外の環境における *h* 化の例は散発的な General Deocclusion によるものだと考えるのが最もよいと思われる²⁰。本発表で定義した *h* 化の規則 (*dehi-edhi* の法則) の利点は以下の通りである。

- (a) 先行研究の説では *h* 化が起こると期待される環境にも起こらないと期待される環境にも反例が存在するが、本発表の規則の場合、少なくとも *h* 化が起こると予測した箇所では必ず起こる。
- (b) 一貫して *dh* が現れる形態が全て *h* 化の環境から外れている。
- (c) *h* 化の有無が揺れうる形態については、*h* 化の音韻的な環境からは外れているけれども、同じ形態素に *h* 化している例がみられるもの、という形でほぼ予測することができる。

また、*dehi-edhi* の法則は順行口蓋化の一種と考えられるため、少なくとも音韻論的に不自然な変化ではない。さらに、このことは PIE **H* の反映形がなぜ Skt. *i* であるのかという問題、あるいは IIr. **H* の音価についての問題に有益な示唆を与える可能性がある。

このように、共時的な体系を検討しても環境が見つからない場合には通時的な視点に立ってその前段

¹⁸ 本発表の主張が正しいと仮定した場合、先行研究で指摘されている環境で *h* 化がしばしば観察される要因は以下のように説明することができる。(i) /V__V: 命令形の語尾 *-dhi* がほとんどの場合で強勢をもつため。(ii) /V__V: **VH* に終わる語根の *athematic* 活用の命令形がこの形になるため。(iii) /V__V̄#: **VH* に終わる語根の命令形の語尾がこの形になるため。(iv) 二音節の語: **H* に終わる語根が語根アオリストを形成する例があまり多くないため。*pāhi* が本発表の規則からの予測通りに *h* 化を示すことから、おそらく偶然である。

¹⁹ 順行口蓋化の例としては、Kobayashi が挙げている例のほかに、共通スラヴ語 (LCS) **do-jǫti* > **dojti* > ボスニア・クロアチア・セルビア語 (BCS) *doći* 「～まで行く」(cf. LCS **govoriti* > BCS *govoriti* 「話す」) 等が挙げられる。

²⁰ なお、*ihá* や *ihī* など、本発表の前提条件において General Deocclusion で説明することとなる例の多くが *-ih-* という音連続をもっているのは、IIr. **H* > Skt. *i* / C__ に伴った *h* 化の環境の再解釈の産物である可能性も否定できない。

階がどうなっていたかを検討することで、新しい発見に繋げる、あるいは少なくとも新しい視点からの議論の可能性を拓くことができると思われる。さらに、本論文の分析結果は、先行研究において例外が存在する音変化とされてきたものも、詳細な観察や新しい分析手法によって、青年文法学派が主張したような例外のない音法則として定義することができるようになる可能性がある、ということを示唆するものでもと思われる。先行研究の把握、文献読解の経験に裏打ちされた洞察力、そして方法論の進歩という「過現未」を武器とすることが、これからの歴史言語学においても重要であり続けるであろう。

略語

Av: Avestan / BCS: Bosnian-Croatian-Serbian / Gk.: Greek / Iir: (Proto-)Indo-Iranian / LCS: Late Common Slavonic / OAv.: Old Avestan / PIE: Proto-Indo-European / Skt.: Sanskrit / YAv.: Young Avestan

参考文献

- Ascoli, G. I. (1868) Lateinisches und romanisches. III. *Indogermanische Forschungen* 17: 241–281.
- Bammesberger, Alfred (1983) Zur Entstehung der vedischen Imperative auf *-(s)i*. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96: 4–8.
- Baum, Daniel (2006) *The Imperative in the Rigveda*. Ph.D. dissertation. Leiden University.
- Bloch, Jules (1929) Répartition des formes de 2e sing. impératif en védique. *Mémoires de la Société Linguistique de Paris* 23: 175–178.
- von Bradke, Peter (1886) Beiträge zur altindischen Religions- und Sprachgeschichte (3. skr. gṛha = germ. Garten, 4. Ueber skr. *h* = ig. *dh*, *bh* und die Stellung des Vedischen unter den indo-arischen Dialecten) *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* 40. 655–698.
- Gotō, Toshifumi (1987) *Die “I. Präsentklasse” im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Gotō, Toshifumi (2013) *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Gotō, Toshifumi (2017) The morphology of Indic (old Indo-Aryan). In: Klein, Jared et al. (eds.) *Handbook of Comparative and Historical Indo-European Linguistics* (Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft 41). vol. 1, 344–377. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.
- Insler, Stanley (1972) Some Irregular Vedic Imperatives. *Language* 48: 551–565.
- Jamison, Stephanie (1997) Syntactic Constraints on Morphological Change: The Vedic Imperatives *bodhi*, *dhehi* and *dehi*. In: Pirart, E. (ed.) *Syntaxe des langues indo-iraniennes anciennes, Colloque international de 4-5 mai 1993*, 63–80. Barcelona.
- Jasanoff, Jay H. (2002) The Vedic Imperatives *yódhi* ‘fight’ and *bodhi* ‘heed.’ *Journal of American Oriental Society* 122(2): 290–295.
- Hoffmann, Karl (1956) Notizen zu Wackernagel-Debrunner, Altindische Grammatik II, 2. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 8: 5–24.
- Hübschmann, H. (1877) *g^l, gh^l im sanskrit und iranischen*. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* 23: 385–399.
- Kobayashi, Masato (2004) *Historical Phonology of Old Indo-Aryan Consonants*. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Kobayashi, Masato (2017) The phonology of Indic. In: Klein, Jared et al. (eds.) *Handbook of Comparative and Historical Indo-European Linguistics* (Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft 41). vol. 1, 325–344. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.
- Kuiper, F. B. J. (1938) Indo-Iranica. *Acta Orientalia* 16: 203–220, 295–326.
- Lubotsky, Alexander (1995a) Sanskrit *h* < **dh*, *bh*. In: Gurov N. V. and Ya. V. Vasil'kov (eds.) *Sthāpakaśrāddham: Professor G. A. Zograph Commemorative Volume*, 124–145. St. Petersburg.
- Lubotsky, Alexander (1995b) Reflexes of Vocalic Laryngeals in Sanskrit. In: Smoczyński, Wojciech (ed.) *Analecta Indoeuropea Cracovensia, vol. II. Kuryłowicz Memorial Volume, Part One*, 213–233. Cracow: Universitas.
- Mayrhofer, Manfred (1986) *Indogermanische Grammatik*. Vol. 1. Part 2. Heidelberg: Carl Winter.
- Mayrhofer, Manfred (1986–2001) *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen*. 3 volumes. Heidelberg: C. Winter.
- Meillet, Antoine (1912–1913) Des consonnes intervocaliques en védique. *Indogermanische Forschungen* 31: 120–125.
- Renou, Louis (1958) *Études védiques et pāṇinéennes*. Tom 4. Paris: E. de Boccard.
- Rix, Helmut (1976) Die umbrischen Infinitive auf *-fi* und die urindogermanische Infinitivendung *-d^hiōj*. In: *Fs. Palmer*, 319–331.
- Rix, Helmut (ed.) (2001) *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Reichert.
- Tedesco, P. (1968) Sanskrit *dehi* ‘give.’ *Language* 44(1): 1–24.
- Turner, Ralph L. (1927) The phonetic weakness of terminational elements in Indo-Aryan. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 2: 227–239. [Reprint in Turner 1975: 291–300]
- Turner, Ralph L. (1975) *Collected Papers, 1912–1973*. London and New York: Oxford University Press.
- Wackernagel, Jacob (1896) *Altindische Grammatik, Band I: Lautlehre*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.